

川越市立特別支援学校
インタビュー

ライター 上村雅代

川越市立特別支援学校は軽度知的障害のある生徒のための、高等部単独設置校です。日本語検定に積極的に取り組み、日本語検定委員会賞を受賞されています。

前校長の山浦秀男先生、現校長の関根康弘先生にお話を伺い、校内をご案内いただきました。

川越市立特別支援学校の学校目標は「ひとりだちする生徒」。自立して働き、暮らす能力を育てる教育を行っています。教科学習に加え、週8時間の「職業（作業）」、学期ごとの「校内実習」「校外実習」を通じて働く力を身につけます。

見学時は「職業（作業）」の授業中で、印刷・セメント・木工・紙工芸・手工芸の5つの班に分かれて作業をしていました。

生徒「押さえ棒を取りに行きます」

先生「はい、お願いします」

手工芸の教室を見学したときの、機織りをする生徒と先生のやりとりです。教室のあちこちから、簡潔で無駄のないやりとりが聞こえてくるのが印象的でした。

また、校内を歩きながら感心したのは、校舎の隅々まで掃除が行き届いていることです。生徒たちの主な就職先はスーパーマーケット（品出しの仕事）、クリーニング店、そして清掃業者。掃除が生徒の一生の職になり得ることを見据え、校内清掃を重視していると伺いました。

見学時には真面目でおとなしそうな生徒たちという印象を受けましたが、「時には暴れたり、バケツを投げたりして騒ぐ子がいる」とのこと。自分のわがママを先生に許してもらえなかったことが原因で、パニックを起こす生徒がいるためだといいます。

「ひとりだちのためには、たとえ嫌なことであってもやれる力を、身につけさせてあげないと」

生徒の将来を真剣に考える先生方の、「本気」ゆえの騒ぎです。関根校長先生はこのような生徒と職員の「信頼関係、強い絆」こそ、本校の最大の魅力だとおっしゃっていました。

「ひとりだち」のためには、それぞれの生徒の適性に合った就職先を見つけ、雇用してもらわねばなりません。学校には各学年に1人ずつ進路担当の教員が配置され、生徒、ご両親とともに就職活動をするそうです。



前校長の山浦先生に、進路担当の先生と大手コーヒーチェーンの本社を訪れたときのことを伺いました。

コーヒーチェーンはアメリカに本社があり、その本社が掲げる理念があります。「豆摘みの人たちの生活を守るため、我々は豆を高く仕入れ、コーヒーを他の店より高く売っている。また、高く売る代わりに障害のある人を健常者と同じ賃金で雇用する。これが使命だ」

この理念のもと、実際にアメリカの店舗で何人もの障害者が働いている姿を見た先生は、日本の本社の採用担当者にアメリカでの様子を伝え、「今ここに、職場実習で働いてみて問題なく働ける子がいる。この子を雇用してくれ」と訴え、みごと就職に漕ぎ着けたそうです。

「させてみてからじゃないと分からない。やらせてダメなら、この子に合う仕事を作れば良いではないか」

心配する採用担当者に山浦先生が言った言葉です。この生徒の活躍を皮切りに、今ではこの企業に支援学校の生徒が就職するようになったそうです。

次ページへ続く >>>



前校長 山浦秀男先生

また、ある卒業生は大手企業に就職し、社内を回って郵便物を配達する仕事を任されています。採用を決めた社長は、「彼女が行くと和やかになる。そのためにやってもらっているのです」とおっしゃっているそうです。

社長はこれまで一流大学を出た人ばかりを雇用し、そうでなければ仕事ができないと思っていたが、それは違ったといいます。大勢の社員が常に部署単位で仕事をしていると、どうしても自分の部署さえ良ければいいと考えがちです。実際、大きな声を出したり関係がギスギスしたりすることもあったといいます。

そんななか郵便物を持った彼女がフロアに現れると、大きな声を出す人はいなくなり、職場の人間関係が劇的に向上したそうです。

社長はおっしゃいます。自分のところだけ良ければという考えを捨て、組織が横に繋がったら、とても強い企業になる。そのために彼女を雇用しているのです、と。

経営者サイドには、こうした視点を持って障害者を積極的に雇用することが求められているのだと感じました。

ところで、日本語検定の合格資格が就職に結びつくなど、今でこそ効果を実感されている本校ですが、受験開始当初は学内に反対意見が多かったといえます。山浦先生も、たまたま手にした問題が2級、3級と高度だったこともあり、まず無理だと思ったそうです。後になって6級を解いてみたけれど満点は取れず、難しさを実感したそうですが、試験に「取り組む」のは良いと考え、導入を決めたといいます。

そうして全校生徒が団体受験をし、結果はほぼ全員が合格。本来ならば一番集中力の高い2、3時間目にやりたかったそうですが、反対意見の多いなか、なんとか許可が出たのは放課後でした。最も集中しにくい時間だったにも関わらず、満点を取った子が3人もいたそうです。

予想外のあまりの高成績に、試験監督だった先生に思わず試験中に教えたり直したりしたのか聞いてしまった、と先生。そんなことはないと言われたそうです。これこそ生徒たちの持っている力が出たのだと、本人はもちろん、教員、親御さん、おじいちゃんおばあちゃんまで大喜びだったといいます。

検定にチャレンジした生徒たちのように、「できないことができるようになる」ことは、老若男女問わず誰にとっても嬉しいこと。それで褒められればいっそう嬉しい、と山浦先生。

生きていく上でもっとも大事なことは「自己肯定感を身につけること」であり、そのためには「やればできる」という成功体験を積み重ねること。日々の学習のなかで夢・ロマン・達成・成就を体感し、「あなたがここにいるからこそ、親も皆も幸せなのだ」と実感すること。それこそが真に生きる力だといえます。

川越市立特別支援学校の例のように、全国の特別支援学校でもチャレンジの輪が広まり、日本語検定が生徒たちの「元氣・夢」に活かされることを願っています。

日本語検定合格は、働く自信に

スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社 店舗勤務

川越市立特別支援学校・平成 21 年度卒 山本萌夏さん



日本語検定の受験案内が来たときには、多少の心配はありましたが挑戦してみたいと思いました。以前から国語は好きで、特に漢字の勉強は自分から進んで取り組むこともあり、プリントを担当の先生から頂いて勉強することもありました。

検定問題はやはり日頃から大切にしている対人関係に必要な丁寧な言葉の言い方や、間違いやすい漢字など広い範囲からの出題でした。できたのかなという心配も少しありましたが、無事合格することができました。今までに検定というものは一度も受験することなく高校生になっていました。合格ということで、自分が認められた、やればできるんだと実感することができ、ものすごくうれしかった大きな自信になりました。

高校生活では、就労・就職活動の一環として、産業現場等における実習を3年間で7回も行き、3年生の実習から今の会社にお世話になりました。

私の持ち味は、性格が明るく、何事もポジティブに考えられること、相手に合わせて会話を楽しむ事ができることです。

現在は、新入社員として気持ちの良いコミュニケーションをとることを一番大事にしています。職場の方々はみんな先輩で一番年下の身ですので、敬語や丁寧語を自然に話せるように意識もしています。

何よりお店に来て頂くお客様に、気持ちよくリラックスして過ごしていただける様にと精一杯心づかいに努めています。仕事でつまづいた時、あの日本語検定で合格できた時の自信が後押ししてくれています。



上村雅代(かみむら まさよ) プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊(共同通信社)共著。現在、息子の育児奮闘中。最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。